

道問し家はうしろにかすみけり
帰るさに余波を啼か夜半の雁
回り来るとしの早さよ御影供
とう見ても柳にくせはなかりけり
初花と今朝はなりけり宵の雨
連翹や親なつかしき書院先
ほんのりと花の外面や花曇り
見かへせは香のけふりか野の霞
汲あけし水の匂ひやこほれ梅
月の行方へもむかす春の雁
実こほれの草青々と弥生かな
また冷のとれぬ光りや春の月

水哉 醉明 可祝 柳哉 清章 其風 正親 橋石 芹節 為外 竹栖 古住

さはやかに雲柵引や涅槃の日
揚さうな声のはつみや初ひはり
洲によせた砂に陽炎立にけり
袖ぬらす雨に香のありねはんの日
古墳に菜の花咲ぬこほれ種
備ふれば鐘もぬれ音や花雫

磐城

擣風 簡齋 朴齋 関東 東木

今朝の海けさの山也はつかすみ

大補 東京

露熏

たそかれや眼をしはた、く花雪吹

蔦二

春雨のふるやうすなり池の面

奚疑

野の寂を洗ひ揚たり春の雨

三岳

山吹や十分春も深きいろ

笑宇

袖ぬらす雫や花の朝あらし

宝蓮

野こゝろのつくや若菜を摘日より

校山

七めぐり花に敷足すむしろ哉

晴川

子につれて遠くも飛す親雀

歎舌

梅か香に整ふけふの会式かな

規

道のなき道たとり行野梅かな

交明

世をともにぬれへきものを花の雨

如水

若草のほのめく色や藁垣根

牛山

七とせを回し墓や風光る

幽篁

梅さくや初午前の宮普請

顔外

夢幻しともわきまへぬ間に

幽篁

うつすりと花に遠のくくもりかな

素柳

なき祖父の七周忌に当りければ

有竹

若草の数に入らはやこほれ麦

三狙

七とせもむかしとなりて竹の秋

有竹

のとかさのあまりて月も曇りけり

静晴

着更衣やうきを忘れぬ草枕

有竹

あたらしき栞て計るや露のたう

峨丘

亡父か黄泉の旅もはや七年を

有竹

青柳を漂はせけり潮かしら

貞和

過しけふ其法蕊をひらきしは

有竹

梅に月春十分の夜なりけり

東枝

し碑前にぬかつきて

有竹

花ちるやひと間静に朝念仏

正佳

あゝの雲の行方なつかし梅供養

一樹

たくみなき枝のしまりや磯の梅

芦水

あゝの雲の行方なつかし梅供養

一樹

をしまるゝ日は立易し花七日

静海

あゝの雲の行方なつかし梅供養

一樹

梅は盛り月はさすかに昔ふり

静遊

明治十六年着更衣 櫻雨書(花押)

黄鳥や声先はまたほのくらき

為川

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有竹

松の下行つもととりつおほる月

菊洲

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有竹

手向たる水にもうきて散桜

柳且

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有竹

もろともに春は行なり山の雲

有耕

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有耕

春寒し袴の裾に苔光る

古仙

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有耕

雲に入る鳥や岬によする波

盛隣

あゝの雲の行方なつかし梅供養

有耕